神父服の彼

蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神父服の彼

【Ｎコード】
Ｎ８０８２Ｘ

【作者名】
蜻蛉

【あらすじ】
神父服を着た騎士見習いの物語。

転生キャラではないのでご注意ください。

１．０　研究所（前書き）

不定期です。

今回は三人称オンリー

1．0　研究所

雲一つなく月が爛々と輝くある日。既に時間は深夜であり、多くの者は寝静まっている。

そんな時間帯の古びた研究所には一人の神父服を着た少年と、修道服を着た小柄な少女の姿があった。

研究所の中は長らく使われていないようで、至る所に埃が被っており散々たる状況だ。

「ホントにあんのかよ。」

「周りに気を付けてね。あんまり変な場所とか触ったらダメよ？」

「……ユニゾンデバイスのくせに偉そうにしやがって」

「何か言った？」

「別に」

自身の肩に乗る小柄な少女の声と研究所の状況を見て、溜め息を吐き、苦々しい顔をする。

少年は自身の赤い目をキョロキョロとさせ、何やら探し物をしているようだ。年の頃は、大体１２歳といったところか。

あどけなさが全身から溢れており、研究所の異様な雰囲気と重なり奇妙な光景となっていた。

その少年は、一言で言えば端正な顔立ちをしている。

その顔は少女に間違われることはないだろう。

だが整っており同世代の子供達が見かけたら、１０人中７人は振り向くであろう。

一方、少女は長い金髪と青く澄んだ瞳をしている。そして端正な顔立ちをしており、修道服も着用している。

「おっ、これか」

どうやら探し物が見つかったらしい。

少年は長く腰まで伸ばした灰色の髪をなびかせながら、目的の場所まで歩く。

「ちょっとクウェス！いきなり触ったらダメよ？ちゃんと確認してからだからね！」

そして古びた戸棚まで近付くと肩で騒ぐ少女を無視して躊躇することなく、ガラス張りの扉を開いた

その時

辺りに騒々しくサイレンが鳴り立てて始めたのだ。それは一つのことが決定したことであり

「はぁ！？何で警報装置が作動してんだ！？」

その音を聞いた少年は戸棚の中にあるモノをしっかりと取り出しながら、怒ったように声を荒げた。

「……だから勝手に触るなって言ったのに」

その少年の肩の上では、少女が目も当てられない、と言った感じに呆れている。

「ルナ！何で止めてくれなかったんだ！」

「アタシは止めたわよ！この馬鹿クウェス！」

「ちげぇよ！この施設の防御機構をだ！この馬鹿ルナ！」

「ここに入る前にアンタが止めなくていいって言ったんでしょ！」

「……って、喧嘩してる場合じゃねぇよ」

「無視！？」

そう少女ルナが言った瞬間、研究室の扉が開いたかと思うと、次々に人型の魔導兵器が入ってきた。

「うわっ。捕縛用じゃなくて殲滅用の機体じゃないか。一体、ここの研究所は何してたんだろな？」

「どうせ禄でもないことよ。」

「まぁ、それはそうだが」

「ほら、早く片付けて帰るわよ」

そう呑気に話をする二人に構うことなく、侵入者を排除するために動き始めた魔導兵達は素早く少年クウェスに近付く。

そしてその一体が持っていた鈍器を躊躇なく勢い良く振り下ろした。

ドォン！という力強い音が辺りに響く。なかなかの力で振り下ろされたようだ。生身の人間では太刀打ちできないだろう。

砂埃が辺り一面に舞い、晴れる頃には彼の無残な姿が

「よえぇ」

晒されることはなかった。

彼は、その場に立ったまま右手で鈍器を受け止めており、一方ルナは眠たげに目をこすっていた。

「ほら、目的物は入手したんだから早く帰ろうよ。またカリムとシャッハに怒られるよ」

「へいへい。それにしても、昔のガーディアンは弱いのな」

彼がそう言いながら、右手に黒光りの魔方陣を展開させ、持った鈍器に力を入れた瞬間

弾けた。

鈍器だけではない。それを持っていた魔導兵までもが、跡形なく弾け飛んだのだ。

「よえぇ」

ルナに即され、歩きながら、赤い目をギラギラと獰猛に輝かせた彼は

「だが、練習相手にはなるか」

次の魔導兵（獲物）へと右手を伸ばした。

１．１　教会（前書き）

主人公はどこかネジがずれてる設定

時代は新暦６９年

この時代だと原作主人公達は１３歳だったかな

1．1　教会

「起きて！時間遅れちゃうよ！」

新暦６９年。

それが今の年代だ。

そして、研究所からブツを確保して数日が経っている。勿論、任務は大成功だ。研究所は少し壊れたが、問題ないだろう。

「ちょっとクウェス？聞いてる？」

「うっせぇな。聞いてるよ。」

私は、隣で浮かびながら、ピーチクパーチク騒ぐルナに相づちを打つとベットから体を起こす。

ふと顔を横に向けると、窓からは朝陽が入り込み、部屋全体を照らしていた。

どうやら朝が来たようだ。最低で最悪な朝だ。一言で言うならば

「眠い」

「ほらほら、早く着替えて着替えて」

朝は苦手だ。何というか……テンションが、そうテンションが上がらないのだ。

「カリムのとこ行くの明日にしようぜ。寝たい」

「ダ・メ。新しい任務の話があるのよ」

「……仕事めんどくさい。他の奴に任せようぜ」

「ほらほら早く！」

再度言おう、非常に朝はだるい。どうして朝がやってくるのだろうか。永遠に夜だったらいいのに。

「クウェス！」

それにしても

「さっきから、ピーチクパーチクうっせぇよ！起きてるよ！私の頭はフル回転だ！このチビが！」

人の耳元で叫ぶコイツにうんざりだ！怒鳴ってもいいだろう！もうちょっと静かに起こせないのか！

そう言うことだから、
後一眠りさせてもらおう。おぉ、ベッドの中は何と心地の良いことか。これなら一瞬にして
「……アウトフレーム・フルサイズ……」
安眠できそうだな。
「おやすっおわ！？」
……最悪だ。まさか、フルサイズになってまで起こすとは！？
今の私は首根っこを掴まれた猫のようである。非常に情けない姿だ。私は１２歳だぞ！屈辱的だ！しかし、そんな羞恥心よりも今は
「……寝かせてくれ」
「最初からこうすればよかったわね」
聞いちゃいない。コイツは私の話を全くと言って聞いちゃいない。
てか何だ？そのジト目は？

私の身長より１０ｃｍ高くなったルナは、私を抱え上げながらジト目で此方を見ている。

喧嘩売ってんのか？

「あんだよ？やんのか？」

これでも私は戦闘力においてはピカイチなのだ。

ただのユニゾンデバイスに負けるわけがない。ギッタンギッタンにしてやるよ！

私に恐いものなどないのだ！

「……アタシのお仕置きとシャッハのお「よっしゃあ！！！目指せ、大聖堂！！！」」

まったく、今日も良い朝である！

……

……

……

あれから数時間後
シスターシャッハの恐怖のお仕置きに怯え……ではなく、朝の眩しい光を受け、目が覚めた私は目的地まで歩き到着していた。
目的地はミットチルダ北部にある我らがセイオウサマーを崇める大聖堂。
ここには直接の上司がいるのだ。
横でふわふわ飛んでいるルナを連れ立って、煌びやかな光沢を放つ扉を開け、中に入る。
教会の広いエントランスには、様々な人間がいた。
。私と同じ様に神父服の者、ルナと同じ様に修道服、そして騎士甲冑姿の者が目に見える。
奴らはガヤガヤと朝っぱらから元気良く騒いでいる。
朝から馬鹿みたいに騒いで楽しいのか？
私なら騒ぐぐらいなら睡眠を取るが……
そんなことを考えながら、奥にある執務室まで歩く私に馬鹿共が群

がってきた。まったく朝から困った奴らだ。

「あ！おはようございます！」

「おはようございさます！」

ふっふっふ、歩く度に人が道を開き、お辞儀をしながら礼節を取っている。

いやぁ、私も偉くなった

「おはようございます！騎士ルナ！」

「はい、皆さん。おはようございます」

……ような感じだ……

それにしても

周りの奴らと楽しそうに挨拶をしているルナが眩しく見えるのは、病気だろうか。

そして男共がルナと挨拶する度にムカムカするのは何故なのだろうか。

あとで医務室に行った方がいいかな？

「また見習いの小僧と一緒にいらっしゃるぞ」

「ガキのお守りなんて大変だよなぁ」

「我らのアイドルを独占しやがって！」

てか、さっきから私を馬鹿にするような声と、殺気がビンビン飛んでくるのだが

殺してもいいのだろうか？

うむ、殺気を私に向けて放つと言うことは殺し合いをしようよ！と言うことだよな。

「よし！殺し合いだ！」

出始めにルナと喋っているクソヤロウから殺し

「あだっ！？」

「何やってるのよ。馬鹿なことは止めなさい。」

「あにすんだよ！」

「何でもかんでも壊す方向に考えるのは、止めなさいって言ってるでしょ？本当に怒るわよ？」

むっ……既に怒っているではないか。そんなに怒った顔で言わなくてもいいじゃないか。

今から楽しい楽しい殺戮の始まりだったのに……

興ざめだ。

実に興ざめである。

「ほら、行くわよ」

「へいへい」

殺し合いをするテンションでもないからルナの指示に従おう。

これ以上、ルナを怒らせたらシャッハが飛んでくるからな。

でもルナに近付いたクソヤロウ共は今度殺っておこう。

1．2　通路（前書き）

短い

今まで書いた中で最低記録更新

1．2　通路

その後、周りにいた騎士達から見ると、ふわふわと浮かぶルナを横に従え

……ではなく、確実に従われたまま彼はエントランスを抜けたようだ。

「騎士ルナ！おはようございます！」

「はい、おはようございます♪」

「ハヨー」

「こら！ちゃんと挨拶しなさい！」

現在、彼は行く先々で挨拶をしているルナを横目に、おざなりに挨拶をしていたようだ。

ルナに注意された彼は、どこか不機嫌そうな顔をする。

「オハヨウゴザイマスー」

そして渋々と修道服を着た女騎士に挨拶すると、その場を去ろう歩き始めた。

「ごめんね」

「いえいえ、昔に比べたら喋るようになったじゃないですか。

……でも独り立ちするのは当分先みたいですね」

「そうね。騎士になるのはまだまだ先ね。一人になんか危なくてさせられないわ」

「もう一度、学院に通わせないのですか？」

「あれから何回か通わせたはしたけど……ね」

そう会話しながら、二人が先行する彼を見ているとルナに言われた通り、挨拶はしているようだ。

「オハヨウゴザイマスー」

「お！クウェス、おはよう」

挨拶された方の神父服を着た男性騎士は慣れたものである。

渋々とした顔で挨拶する彼に対して、元気よく挨拶を返し、喋り掛けた。

「聞いたぞ、任務成功したらしいな。このまま順調に行けば騎士になれるかもしれないぞ」

「……そう」

だが、彼は挨拶だけをして他は喋ることはありません、と言わんばかりにスタスタ歩いていった。

「相変わらずだなぁ」

そんな姿を見て男性騎士は苦笑している。そんな彼らを見てルナと女性騎士も苦笑して会話しようとするが

「ルナぁ！早く！」

何時まで経っても来ないことに痺れを切らした彼によって、それ以降の会話は終わらせることになった。

「はいはい、それじゃまたね」

「えぇ」

その後、追いついたルナは彼を連れ立って幾分か歩き、ようやく執務室の一つに辿り着いたようだ。

目の前にある重厚な木製の扉に手を掛けた彼だったが

「ストップ。ちゃんとノックして相手から了承があってからよ」

どうやら社会の礼儀の一つであるノックをせずに扉を開けようとし

たようだ。

「前にちゃんと教えたでしょ？」

「めんどい」

（別にしなくても大丈夫じゃないのか？意味分からん）

そう考えた彼だったが室内に、自分に取っての強敵、

シャッハがいるかもしれないとも考えると、嫌々ながら扉を叩き相手の返事を待った。

ノックをしてから数秒後、扉が室内の方から開く。その扉を開いた人物は彼の強敵、シスターシャッハであった。

彼女を見た途端、げんなりとした顔つきになった彼は

「ご苦労である」

そう声を掛け、扉を開けた人物を極力見ないまま室内に入ろうとするが、そんな彼を出迎えたのは了承の返事ではなく

「あだっ！？」

青筋を浮かべたシャッハの拳であった。

「あにすんだ！おわっ！？」

いきなりの拳骨に、涙を目に浮かべた彼は反論しようとするが、自宅でルナにされたが如く、首根っこを掴まれてしまった。

彼より背が高いシャッハは軽々しく持ち上げている。

だが、朝にルナも軽々しく持ち上げていたことから、どうやらシャッハの力が強いのではなく、彼が軽いようだ。

「入口で殺し合いとか叫んだそうですね。

やはりあなたはヴェロッサ同様、一度、みっちり教育する必要があるようです！」

「ひぃ！？や、やめ」

怒りのオーラを纏った状態のシャッハに掴まれた彼は室内に消えた。

1．3　執務室（前書き）

主人公は子供

1．3　執務室

執務室に入った彼は、シャッハに首根っこを掴まれたまま、隣にある書庫へと連れて行かれた。

その道中

「ルナ、カリム！助けて！」

「あらあら」

「シャッハ、きちんと教育して上げてね」

「勿論です」

「裏切り者がぁ！てかカリムは私の声が聞こえてないのか！？

何だ！あらあらって！？」

「こら！暴れたら、もっと酷いことになりますよ！」

「ひぃ！？この悪魔がぁ！」

「私はシスターです！」

「あだっ！？な、何も叩かなくても……」

と、騒がしく会話をしながら書庫へと消えた。

完全に書庫の扉が閉じるまで、騒がしさが消えることはなかったが、閉じられると室内には静寂が舞い戻ってきた。

さすがは聖王教会の執務室と言った所か。なかなかの防音性があるようだ。

そんな残った二人にとって、今回のようなことは珍しくないのだろう。

「ごきげんよう騎士ルナ」

「えぇ、ごきげんよう。騎士カリム」

二人は何事もなかったように会話を始めるのであった。

…

…

…

…

…

「今日はここまでです。クウェス？わかりましたか？」

疲れた。非常に疲れた。

現在は朝ではない。既に夕方だ。わかるか？

ゆ・う・が・た・だ！！

窓の外を見ると夕陽が今にも沈みそうな時間帯である。

……長い長すぎだよ、シャッハの説教＋勉強会。

まさか延々と休憩時間も無しに教育されるとは思いもしなかった。

ちょっと調子に乗って叫んだだけじゃないか！

ちくしょうが！

……二の次は踏まないようにしなければいけない。

ふむ、今度からは、思っても口に出さず心の中に留めておこう。

「……聞いていますか？」

「ひゃ！？」

し、シャッハよ、顔が近いし怖いぞ。朝に見た、ルナの怒った顔が可愛く見えるほどの形相だ。

それにしても、８時間も喋ってばかりだったのに疲れてないのか？

……コイツ、本当に人間なのか？

……まさか……コイツ……

ルナと同じ様にユニゾンデバイスではあるまいな。
むぅ……ありえるか。

なら差し詰め、カリムが主と言ったところか。いや……ヴェロッサか？

「ク・ウ・ェ・ス？」

っと、考えるのは後にしよう。シャッハの拳が飛んできそうだ。

「わかったんですか？」

「イエス。殺人ダメ絶対」

そう、安易に人を殺すとか言っちゃダメ。と言うか昔に習ったことだからちゃんと覚えていた。

今回はただ叫びたかったんだ！何か知らないがムカムカきてしまったから叫んでしまっただけなのだ。

「そうです。やっと思い出したようですね。次は忘れたら駄目ですよ？」

忘れていない。ちゃんと私は覚えていた。

しかし、しかしだ

本当にムカついた時はいいよね。

さて、それよりも

「腹減った」

さすがに腹が減ったぞ。

というか今の時間帯だと昼ご飯を通り越して晩御飯になるではないか。

あぁ……一食分の満足感が得られないとは、実に勿体無い。

1日三食は絶対なのだ！

「あら、もうこんな時間なのですね」

「時間がわからないほど熱中していた……だと」

「誰のせいだと思っているんですか！大体あなたが」

「先程、今日は終了と聞いた。シャッハセンセー、ありがとうございました。」

再び説教系を始めようとしているシャッハにはうんざりだ。隣の執務室に行こう。カリムとルナがいるはずだ。

「あっ！こら待ちなさい！」

シャッハなんて無視、無視。

今の私は背中とお腹がくっつきそうなのだ。

早く家に帰ってルナのご飯を食べたい！今日は何だろうか？

ワクワクしてきたぞ♪

そう湧き上がる気持ちを抑えながら、私は執務室へと繋がっている扉を開けた。

むっ、どうやらルナは居ないようだ。

カリムだけが高級そうな机で仕事をしている。どこへ行ったのだろう。

「あら、クウェス。シャッハとの勉強会は終わったの？」

「終わった……ん？あ……し、しまった！？」

「ん？どうしたの？」

わ、忘れていた。

…

…

…

「クウェス？」

執務室に備え付けられている書庫から出てきた彼を見てカリムは困っていた。

（どうしたのかしら？）

扉を開けた彼に自分が喋り掛けると口を開いたが、すぐに口を閉ざして何やら考え始めたのだ。

その後ろでは首を傾げたシャッハが立っており、彼女でも彼が何を考えているのか、わからないようであった。

（ルナが居ないからかな？）

先程まで自分の仕事を手伝ってくれていたルナは、とある事情で席を外している。

彼にとって親のような存在のルナが居ないことで寂しくなったのだろうか。

と、考えたが

（それはないかな？お昼も食べてないし、お腹でも空いたのかな）

そう考えると席を立ち、側まで近寄った。

すると、彼は俯けていた顔を勢い良くガバリと上げた。

その顔は何やら思い付いたようにニヤリとした顔である。

そして彼は自信満々である！と言うかのように開いたままである扉を拳で叩いた。

「入ってもいいだろうか。騎士カリム？」

…

…

…

危ない危ない、ノックをするのを忘れていた。再びシャッハの説教は嫌だからな。

普段はやらなくても大丈夫だと思うが、ここにはシャッハがいるからな。
きちんとせねば。

そう考えた私は一度、扉を閉める選択を取ろうとしたが、素晴らしい案を思い付いたのだ。

そうさ

ノックをし忘れたのならノックをすればいいじゃない！

という、素晴らしすぎる考えを思い付き、扉を叩いたのだが

目の前にいるカリムの様子が変だ。顔を赤らめて目は潤ませ、全身がぷるぷる震えている。

怒っている？

私の行動は違うのか？

むぅ、カリムに怒られても恐くないが一度戻るか

しかし

「何が駄目だっ「可愛い♪」むがっ！」

な……んだと、いきなり抱きつかれたぞ！コイツは変態だったのか！？

「あなたもきちんと成長しているのですね。2年前に比べたら恐ろしい成長力です。あぁルナが羨ましい。私も子供が欲しくなりそうです」

「ぐぇぇぇ！？」

ぐっ、抱き締められて声が出せない！てか子供扱いだと！？

私は12歳だぞ！もう立派な、

「今回はノックしなくてもいいのよ。でも相手のことを考えてくれたのね。本当に成長したわね♪」

って胸に鼻と口が塞がれて息ができな……い……い、いきがぁ……
……

「よしよし♪良くできました♪」

「……」

「き、騎士カリム！離れてください。このままではクウェスが窒息死しますよ！」

「あらあら♪」

1．4　執務室のソファー（前書き）

彼は子供扱い

1．4　執務室のソファー

太陽が沈み、多くの者が夕飯を取っている時間。

とある執務室では、客人用の高級感溢れる黒いソファーに、カリムが座っていた。

横にはシャッハが立ったまま、何やら書類を読み上げているようだ。

「子供のほっぺは、ぷにぷにね～♪」

だが、カリムはただ座っているだけではない。

修道服に隠された自身の柔らかな太ももに、眠っている彼の頭を置いて座っているのである。

俗に言う膝枕状態だ。

そして彼の顔はカリムの女性らしい、しなやかな指先によって遊ばれているようだ。

「わ！見て、シャッハ！伸びるわ！？」

「あんまりクウェスで遊ばないで下さい。それより報告を……」

「もう少し待って。普段は過保護なルナのせいで、こんなことできないんだから！今のうちに……」

教会内に問わず管理局でも美人と声が高く、絶大な人気を誇るカリムに、膝枕をされている彼。

端から見れば羨ましいこと、この上ないだろう。

だが、それは周りから見てであり、膝枕をされている当の本人は

子供扱いするな！

と目を覚ましていたら、叫んで拒んでいただろう。

しかし、今の彼は寝ているのだから、どうしようもできないのが事実である。

「お持ち帰りしていいかしら？」

「駄目ですよ。」

「むぅ」

顔を掴まれて遊ばれている彼は、当然のごとく顰めっ面をしている。

だが

「はぅ……可愛い♪」

そんな仕草もカリムにとっては、可愛らしい仕草に見えるらしい。

完全に子供扱いな彼である。

「良い子♪良い子♪」

顔を近付けて、そう言ったカリムは、垂れ下がってきた金色の光沢

を放つ髪を耳に掛けながら悦に浸っているようだ。

そんな姿を見て、心の中で溜め息を吐いたシャッハは、カリムが満足するまで報告を待つのであった。

それから大分経ち、ようやく満足したのか。笑みを浮かべ頬を上気させたまま、カリムは顔を上げた。

それを見たシャッハは長年の経験で分かったのだろう。報告をし始める。

「前回の任務で、クウェスの騎士としての必要任務課程は半分がクリアされました。」

「この子も頑張ったのね。よしよし♪」

「経った一年でここまで漕ぎ着けるとは思いもしませんでしたよ」

再び顔を下に向け、彼の頭を撫で始めたカリム。

そしてシャッハは信じられないと、でも言わんばかりにそう呟いた。

その呟きを聞いたカリムは、悦の入った顔つきから一変して、哀愁感漂う顔つきになると頭を撫でながら言葉を紡いだ。

「やはり……この子が戦闘用に造られたのも関係しているんでしょうね……」

「……はい……」

そう話した後、一瞬の静寂が執務室を覆う。

しかし

「あと残っているのは、表での活動や教会内での仕事だったかしら？」

すぐさま、顔を上げたカリムによって静寂は打ち切られた。

それに従いシャッハも何事もなかったかのように装い、話し始める。

「はい、今後は教会内での仕事・管理局側との合同任務が大半になりそうです。」

「そう。……あら？そう言えばこの子、デバイスどこにやったのかしら？」

「それなら……」

その後も、執務室に用事を終わらせたルナが帰ってくるまで、話は続けられた。

…

…

…

「只今、戻りました。ってカリム！クウェスに何してるんです！離れて下さい！」

「あら、この子が望んだのよ？それにさっきは、私に抱き付いて来たんだから♪」

「そ、そんな馬鹿な……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8082x/

神父服の彼

2011年10月26日01時46分発行